

書籍紹介

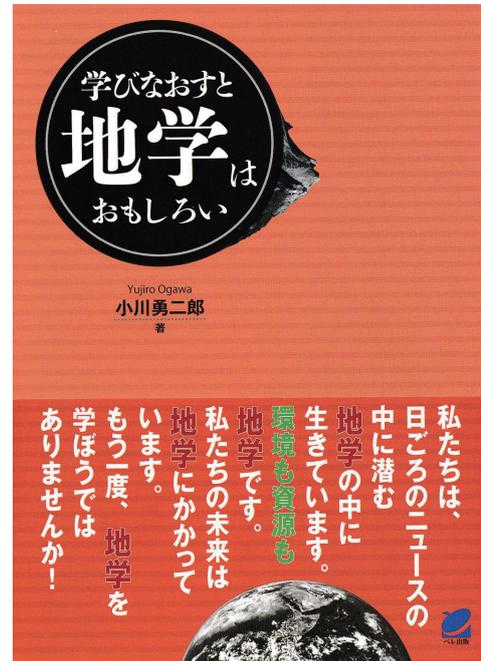
学びなおすと地学はおもしろい

小川勇二郎著

(株) ベレ出版
2010年10月20日, 第1版
サイズ: 18.8 x 13.2 x 1.6 cm
白黒版 187 ページ, 並製
ISBN: 978-4-86064-270-9
価格 1,620 円

筑波大学名誉教授である小川勇二郎先生は、私の心の中の恩師である。先生と初めてお会いしたのは、1990年頃、私が北海道大学の大学院在籍時であったと記憶している。その当時、小川先生は九州大学に在籍され、四万十帯や秩父帯の付加体およびオフィオリティック・メランジュの変形構造の研究で世界に名を馳せておられた。大学院生時代に日高累層群と呼ばれる付加体らしき時代未詳の地層を暗中模索状態で記載し続けていた私にとって、小川先生の付加体地質学の講義は斬新なものであった。説明がたいへん上手で、終始理路整然とした話し方をされるので、集中して講義を拝聴していた。特に、難しい理論や概念を平易な言葉に置き換えて話すことがとても上手であった。また、私の視線から見て、小川先生は、昔の教室においてなられた権威主義の大先生とは一線を画しており、威張らず、高ぶらず、私のような出来の悪い学生の発するくだらない意見を淡々と頷いて聞いて下さったことを記憶している。その後、小川先生は筑波大学に転出され、私も1997年から工業技術院地質調査所で働くことになったことで、つくば市で再会することになった。ご自宅で開かれるパーティーに度々誘って頂き、時々私の研究に関してクリティカルなアドバイスを頂いてきた。

小川先生が筑波大学退官後の2010年に一般普及書をお書きになられた。本のタイトルは“学びなおすと地学はおもしろい”である。私たちのまわりには地学の話題があふれており、テレビ番組のニュースでも必ず地学に関する話題がある。2011年3月11日東日本大震災以降、注目度が高まった地震や津波、火山噴火、環境問題、資源問題、地球温暖化による異常気象、降雨による斜面崩壊や土石流災害もその例である。NASAのマーズ・パスファインダー計画やJAXAによるはやぶさ計画も地学分野の話題であ



る。このように、私たちの足元には、46億年の悠久の時間が作り上げた大地、大気、海が、宇宙にはきらめく星々が広がっていて、それらの成り立ちを正しく理解することは、地球で生活する上でとても大切なことだと理解出来る。ところが地学という裾野の広い学問は、元を正せば中世の貴族の趣味で始められた博物学が祖となっており、学問としての完成度という観点からは、物理学や化学には見劣りしてしまう。また地学という教科は、高校で習うことはあるものの、とかく地味で、3K（危険、汚い、きつい）で、格好良くないというのが、一般的な見方と言える。

小川先生の本は、我々の生活に関わる自然現象をテーマとし、分かり易くかつかなり高度な理論や概念まで上手く説明している。またその内容も、小川先生の関心の向くままに自由に書かれている印象がある。そのため、13章の章立ても、第1章「人間と地学」に始まり、第2章「流れの地学」、第3章「海水の地学」、第4章「破壊の地学」、第5章「摩擦の地学」、第6章「温泉の地学」、第7章「地震と間隙水圧の地学」、第8章「災害の地学」、第9章「段丘の地学」、第10章「河川の地学」、第11章「泥と砂の地学」、第12章「経度の地学」、第13章「隕石の地学」となっており、章ごとに話題が完結している。

本書を通読すれば俯瞰的に地学をとらえられるである

う。その一方で、章毎にコラムをもうけ、関心を掘り下げる仕掛けがあり、さらに巻末の参考文献から自ら学ぶことも出来るようになっている。この本は東日本大震災の前に書かれたものだが、特に地震のメカニズムについては、第7章や第8章に大変詳しく書かれており、2011年の被災後であっても参考になる個所は大変多いと思う。但し、地学の素養がそれなりにある人であれば、読みやすい本であると思えるだろうが、対象とする読者層がややあいまいであり、個々の専門用語が詳しく解説されていないので、分かりづらく感じる部分が多々あるかもしれない。それを差し引いても、作者の体験に基づく箇所、例えば、大学院生がいともカンタンに再現してしまったサイスマイトの逸話、煎餅の割れ方を用いた応力集中による破壊の解説、日

常的に用いるストレスを地質学的に説明したりする比喻等は、誰でも読んでいて小川先生のユニークさを感じられる。

巻頭のはじめにの文章中にも、カルフォルニア大学のエルドリッジ・ムーアズ教授が2008年の万国地質学会議において“Geology underlies everything!”という名言を述べられたことが紹介されているが、それは“すべては地質学（広義では地学全体を指す）を基礎としている”ということの意味するのであろう。この言葉からも、現在の地球全体の環境や資源問題を論じる上で、“地学が重要だ”という認識は徐々にではあるが世界規模で広がってきていると実感している。（産総研 地質情報研究部門 七山 太）